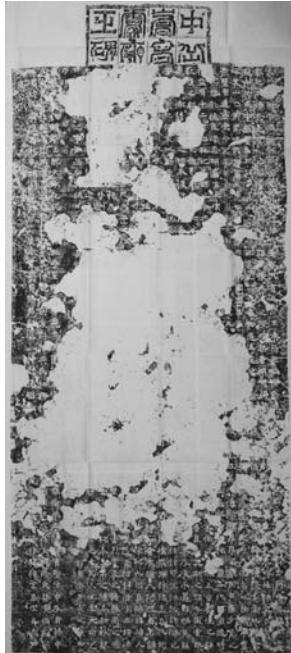


中岳嵩高靈廟碑

太安二年(456)
(北魏時代)

図版②



図版④「中岳嵩高靈廟碑整拓本」



図版③「原碑(右)、重刻碑(左)」

大正時代の初期に、中村不折や河東碧梧桐により六朝碑刻の新奇な書

に注目した書法研究が提倡された。
このグループを龍眠会と称した。彼

らが大いに着目した碑刻の一が「中

岳嵩高靈廟碑」である。原碑は河南省登封の中岳廟にあり、碑文は大きく破損している。北魏時代の楷書で

あるが、鄭道昭や龍門造像記とは異なり不思議な趣を示している。図版

①に示したように楷書であるが、左 払いなどは終筆をやや太くする所がある。また選字図版②のBが主たる書風であるが、所々にAに示したように横画を水平に書き、隸書に近い構成を示す雄強な文字（前号の天發神識碑の横画に近い）がある。八分隸書の特徴である波磔は見られないが、文字の構成に隸書の流れを窺うことが出来る。無骨であるが、大変に力強く雄大な趣を示している。不折や碧梧桐の書は、この種の碑刻の魅力を取り入れ、自己の書風を作り出している。図版②Cは、碧梧桐の作品から集字した。

次号は、「天柱山銘・鄭述祖」です。この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス

mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

旧い書法様式の刻石⑤

木 雉

木 雉
伊藤 滋

図版① 「小譜やや」

書道芸術院

平成の群像 (2012)



第63回毎日書道展「海の方へ」(前田鐵之助詩)

早いもので故浜田一堂先生が亡くなられて3年になりますが、その間には平成23年3月11日には東日本大震災、同年7月には余震と、さらには福島の原発事故により、多数の死傷者被災者がおられ、避難所生活を余儀された方々、風評被害や自肃ムードで以前とは一転、沈滞し疲弊した心での日常生活が続くこととなりこんな時に自分だけがこんなことをしていてもいいのかと思いませんでしたが、こんな時だからこそ懸命に書いて皆さんに元気にしていますよ、との証にしたいものだと思いながら書いた、第63回毎日書道展出品作で、前田鐵之助詩「海の方へ」です。震災後を見る川や海は何事もなかったかのように穏やかに見え底は激流であることなど想像することさえ出来ません。穏やかな川面、底の激しい流れ、そんなことが少しでも表現することが出来たならばと思いから書いた作ですが

かがでしょう。

書道芸術「21世紀の書」で記したよ

うに思いますが一行でも一字でも、一線でも観ていただいた方々の心の片隅の記憶に留めていただけるような文字や線を書いて行きたいものだと思っております。

書は空間の美、線の美、墨の美であるとも言われておりますが、私はそれと同時に人格の型成が大事なことであると思っております。宮城野書人会の主張の一つである、羊毛、長峰、超長峰、濃墨で粘りのある線、渴筆の美、又、書人会精神（これは取りも直さず故加藤翠柳先生の主張であり精神です）を忘れることなく、人格型成に作品製作に臨んで行くことと同時に、後輩の方々に、この書人会の主張や精神を伝えて行くことが、大事な事ではないかと思っております。



佐藤無極

書のひろば

理事長
辻元大雲

田中韓友好交流の行方

近代法治国家とは到底言えない乱世者との未熟な国と感じてしまう。我々書に関わる者ばかりでなく、あらゆる芸術文化、スポーツなどの友好交流を継続し、お互いの友誼を深めあってきた関係者の心中はいかばかりであろうか。国交断絶の時代から當々と築き上げてきた文化を通じての友好交流は多くの成果を上げ、同じアジアの民族として心を合わせ、互いの国情や価値観の違いを乗り越えて友情を育て、文化の発展に寄与してきたことは我々の大きな財産である。またこれを将来に向け継続、発展させる責務がある。今回の騒擾の影響で芸術文化そして

最近の世情は日本と中国・韓国との間の小さな島の領有権問題で大揺れに揺れている。歴史的な経過や政治的な様々な疑惑や駆け引き、力関係などからみあい、これといった解決策が見いだせない戦後最悪といわれる対立構造が続いている。我々一般人にとっては何ともやりきれない、不快な気分がつのるばかりである。中国各地の激しいデモや暴動のあり様を見るにつけて、近代法治国家とは到底言えない乱暴者の未熟な国と感じてしまう。

国交正常化40周年という重要な節目でありながら相次いで中止や延期に追い込まれている。書道関係では全日本書道連盟と中国書法家協会共催の「日中國交正常化40周年記念 日中代表書法家展」は4月に東京虎の門、中国文化センターほか新潟、長野と3か所で開催され、この10月には北京市天安門広場に面する新装なった中国国家博物館での開催予定が延期となり、9月21日開幕の北京市書法家協会主催の「2012北京市書法国際ビエンナーレ」でも毎日書道会、白扇書道会関係者の訪問は見送られることとなった。第64回毎日書道展入賞者代表を派遣する毎日書道研修団も10月初旬に訪中予定が延期となつた。いずれも今後的情勢を見極めて実施を検討するとはいえ、見通しは暗そうである。

ホールにて、第60回記念書籍社展と併せて開催。9月1日午前、書籍社学生展表彰式に続き作品解説会が恩地会長、小竹常務理事、滝理事と共に辻三九郎進行で行われた。午後からは地元関係者をお招きして祝賀会が津田海仙支局長のもと盛大に催された。

日からの東北仙台展に担当として訪問、17日午前会場にて作品解説と席上揮毫をさせていただく。午後からの出品者は懇親会にて揮毫作品を抽選で差し上げ喜んでいただいた。今回展実行委員長を千葉蒼玄本院事務局長が務められ重責を果たされた。8月初旬の関西展では小伏小扇本院理事が実行委員長を務められ、本院関係者の活躍が目覚ましかった。会員諸氏のご協力ご支援に感謝。

飯高和子さん万葉の歌碑揮毫



小竹石雲當務理事による作品解説（高岡）

業として位置付けられ、10月7日除幕式が執り行われる。

巡回展 北陸展・関西展開催

全国13会場を巡回中の役員作品展は
8月31日から北陸支局富山県高岡文化

第64回毎日東道展東北仙台展

漢字(一)

石田春窓

かな(一)

平川峰子



第58回書道芸術院展「亀」

石田春窓書

第64回毎日展の書道芸術院、祝賀会の時に、「21世紀の書—私の主張」の原稿の依頼をいただきました。今回は、第58回書道芸術院展に出品しました。「亀」について書きたいと思います。普段は、書きおえると少しにじみを確めてから、余分な墨をとって乾かしますが、この「亀」については台所で昼食の用意をしていましたので時間を置き過ぎました。それが偶然亀の甲の様な感じになつたと思っていま

す。運筆はゆっくりと、筆の弾力をきかせて、書いたのを覚えていています。書は、古典をしっかり学ぶ事、即ち臨書が大切だと教えられています。

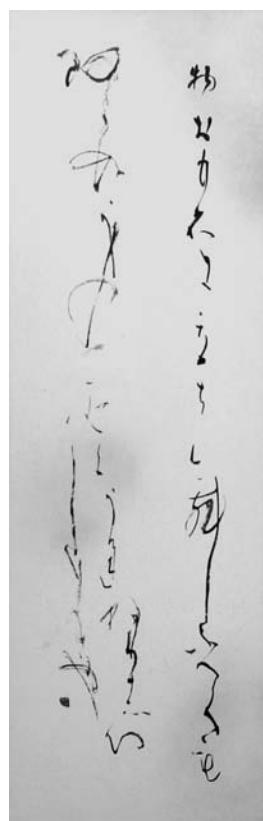
「亀」の作品は、春窓個展の時、ベルリンで活躍中の抽象画家「寺田琳」先生との出会いがあり、現在ベル

21世紀の書

—私の主張—

今年7月29日まで東京国立近代美術館で開催された吉川靈華展を観て近年で一番の感動を覚えました。サブタイトルは「近代にうまれた線の探究者」十代では、生き物のスケッチを、次第に着物や武具の絵。そして観音像、武将、延暦寺の伝教大師、京都方廣寺の天井画の龍。どれをとっても線が生きていて味わい深い作品でした。画家であるのに、いえ画家だからこそ線を大事にし、絵の線の為に書（漢字・かな）を勉強したようです。逡巡のない

線で描かれた仏はいかにも清浄な雰囲気で、晩年（大正12年～昭和4年没まで）は、日本・中国の古典文学や伝説にロマン的な題材を探り、画中に物語をかな書で添える仕事に情熱を注ぎ、その線はまさに絵をなす線と同質であり、気品と高踏な作風が醸成されていったのです。以下は、作品集からの引用ですが、「典雅にして清冽なる線描美の世界。靈華の芸術はそのように言い表われます。この展覧会が現代の芸術表現に対しても大きな刺激となることを願います。」



2002年7月 每日書道展 每日賞

平川峰子書

平成24年度 新審査会員作品

尾崎仁水（漢）・小原華杏（現）・羽田招佳（か）・高橋潤（漢）

「感」

尾崎仁水
(高知)



審査会員への昇格にありがたさと責任の重さを感じております。書に向かうことがでるのは「師をはじめ、仲間の支えがあつてこそ」との思いを形にし「感」といたしました。

恩地春洋先生より『学書のめあてをはつきりとし、そしてブレないこと』とお言葉をいただきました。肝に銘じつつ精進してまいります。

小原華杏
(岩手)



「母老いて北の渚のようである」
山口剛句



羽田招佳
(福島)

「山里は霞みわたれるけしきにて空にや春の立つを知るらむ」
(西行法師)

構成の美しさを意識して、流れ良くリズミカルに書くよう心掛けました。
「余白の美」を忘れず深みのある豊かな線で、イメージ通りに作品作りが出来るよう精進したいと思います。

(招佳)



高橋潤
(千葉)

「離騷」(篆文)
帝高陽之苗裔兮朕皇考曰伯庸
庸攝提貞于孟陬兮惟庚寅吾以降
皇覽揆余初度兮(以下略)

連作中の、屈原『離騷』の一節を銀泥で書きました。

まだ遠い道のりですが、鋭利にして寛縝とされる法華義疏の領域に少しでも近づけるよう鍛錬を続けてゆきます。

審査会員という意味をしっかりと心に留めて、品格ある作品を目指し精進を重ねてまいりたいと存じます。(潤)

平成24年度 新審査会員作品

II

小林椿寿（漢）・熊谷青山（現）・大沼樵峰（篆）・佐々木蒼楓（現）



小林椿寿
(大阪)

「道」



熊谷青山
(宮城)

「日ざかりの潮もてあらふ
市のあと」（水原秋桜子）



自然や風景を詠った詩歌が
好きで素材としています。
書道の奥深さに浸つて30年。
宮城野書人会、そして書道芸
術院の諸先生や書友のお陰で
今のが在ります。
納得のいく作品はなかなか
書けませんが、今後も精進し
たいと思います。（青山）



大沼樵峰
(宮城)

「萬里一孤舟」劉長卿

書は喜びである。筆や印刀

を持つことは至福の時である、
と言ったら、何甘いことを、
とお叱りを受けるかもしれない。
でも楽しいのだからしょ
うがない。ほぼ毎日喜々とし
て筆を取っている。そんな小
生の書作の日々に「飛動之意」
を伝えてくださる後藤大峰先
生には感謝の言葉しかない。



万里一孤舟 樵峰

(樵峰)



佐々木蒼楓
(青森)

吉岡禪寺洞

「一握の砂を蒼海にはなむけす」

青い海と白い砂浜、そしてそこを通り過ぎる人々の感傷を白の空間を生かした表現にしてみました。

師、仲間に感謝に、人を惹き付ける書、魅力ある書を目指し、今後一層精進して参りたいと思いを新たにしております。（蒼楓）



高山千彩

君馬

「冬晨雪明峯」陳高

この字、こんな風にも書け
るのか！西林先生の書を見て
そう思った。嗜なへられれば
と始めた書だが、気がつけば
30数年、良くぞ続いている。
そう思い乍ら今も筆あとを見
る。書の道の深さが年々増す
様に思える。自己満足で良い
から、そんな醍醐味も味いた
い。と、前橋への道経もないと
まない。(千彩)



塚本真由美

樹

大地に深く根をはり、力強く天に向かう。誠実・慈愛・豊穣・そして潔さ。自分にはないゆるぎない存在感に魅かれます。

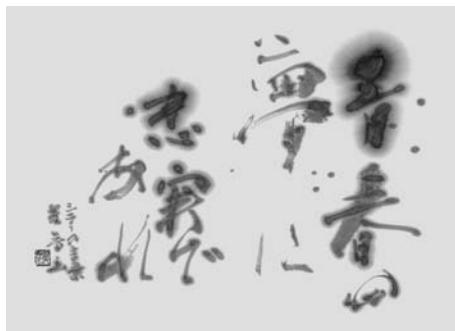
(真由美)



土井 琴翠
(大阪)

「玄妙」

春洋会の恩地先生、琴水先生に、ご指導を受けて、この度昇格となり、身の引き締る思いです。



A black and white portrait of Dr. Linda K. Johnson, a woman with short dark hair, smiling.

倉翠芳
(岡山)

高校の授業がきっかけで書の楽しさを知り、嫁ぎ先の岡山で師小竹石雲先生の書に出逢った時、何とも言えない感動を覚えました。今回はその頃を思い出しシラーの言葉を淡墨で書きました。夢・魅 力ある作品を今後作っていきたいです。



卷之三

これまで導いて下さった師に感謝しつつ豊かな「樹」になれるよう精進します。



A black and white portrait of a woman with short, dark, wavy hair. She is looking directly at the camera with a neutral expression. She is wearing a dark-colored top with thin straps. The background is plain and light-colored.

大地に深く根をはり、力強く天に向かう。誠実・慈愛・豊穣・そして潔さ。自分にはないゆるぎない存在感に魅かれます。

これまで導いて下さった師に感謝しつつ豊かな「樹」になれるよう精進します。

(真由美)

第48回 書道芸術院単位認定講習会（鳥取）

会場＝（第一会場）北栄町北条農村環境改善センター
(第二会場)はわい温泉 望湖楼

会期＝平成24年8月18日（土）～19日（日）

主管

山陰支局長　名越　蒼竹
事務局長　生田　翠龍

第48回書道芸術院単位認定講習会は
われたところが従来の講習との大きな
違いとなつた。

支局の所在する鳥取県倉吉市の北に隣

接した「名探偵コナン」の作者青山剛

昌氏のふるさと、北栄町の「北栄町北
条農村環境改善センター」を中心を開

催された。

開会式では、辻元大雲理事長から主
管山陰支局への労いを頂いた後、本会

があらゆる書道分野を網羅しているこ
とを踏まえて、会員の皆さんには自分

の専門分野だけではなく、あらゆる書分
野を理解し、書作に役立てるように、

との激励の言葉を頂き、早速講習会に入
った。

今回の講習は新たに「書写教育」の
単位が加わったことと、全て机上で行



開 講 式

【篆刻】

講 師＝後藤 大峰先生
助講師＝佐藤 香山先生
助講師＝大沼 樹峰先生



後藤大峰先生による解説

でも、印刀を持つことが少ない受講生
には、彫るだけとはいえ、筆との勝手
の違いに戸惑うことも多かったようだ
。あるが、提出した印材は、翌日には講
師陣によって補刻され、使える印にな
るあって、これを楽しみに印刀を集め
はじめていた。

1限目の終了後は猛暑の中、吹き
出る汗を気にしながらの記念集合写真
撮影を済ませ、冷房の良くな効いた会場
へ戻って昼食をとった。

を高めて受講生は一心に取り組んでいた。



【かな】

講 師＝下谷 洋子先生
助講師＝大辻多希子先生

2限目は下谷洋子先生の「かな」。「大字かな」を経験していただきたかったということだが、机上講習という制約のため、半紙に「小字かな」を創作する課題となつた。古筆の見方や作品への生かし方、連綿の理論解説と要体がなの使い方などの説明が行われた後、参考手本を見ながらの実習では集中力



下谷洋子先生による解説



【現代詩文書】

講 師＝浜田 堂光先生
助講師＝山田 桦江先生



浜田堂光先生による解説

3限目は浜田堂光先生の「現代詩文書」。高等学校の書道の教科書を使って、漢字、かなの臨書から創作への展開方法や、羊毛に拘ることなく、さまざまな用具での表現方法を模索することの大切さを説明され、受講生は書の空間処理と融合性を意識して実習に臨んだ。提出課題は三種類で、皆が苦労



津田海仙先生による解説

4限目は津田海仙先生の「前衛書」。初日最後の講習で、受講生に疲れが見え始めていたが、講師・助講師の実演が始まると、受講生の目は、見違えたかのように輝きを取り戻していた。

【前衛書】

講 師＝津田 海仙先生
助講師＝大石 仙岳先生

しながらも充実した80分間を過ごしたようである。

「前衛書は用具用材も題材も『ねばならない』ということはありません。ただし、造形と線による空間の美しさを見る人が体感できる作品を目指してください」との前置きがあつて、「○△□」を用いて作品化するという課題に

取り組んだ。受講生は、始め制約の無さを楽しんでいたが、書き進むにつれて、実は自由ということが難しいことであると痛感していたように思われる。

昼の猛暑、夕方の豪雨を乗り切って、講習1日目終了後はCMで有名になつた鳥取のハワイ（湯梨浜町）にある湖

上温泉ホテル「望湖楼」での懇親会が

開かれた。民謡と三味線を聞きながらの晚餐となり、程よくお腹を満たしたところで、山陰支局恒例のジャンケン大会となり、講師の先生方からいただ



様々な線を表現するための筆

いた書作品や地元因州和紙セット等の賞品をめぐって、大いに盛り上がつた。



宴会でのジャンケン大会

【原拓書道史】

講 師＝種谷 萬城先生
助講師＝大石 燐軒先生

明けて、講習2日目の1限目はホテ

ルの大広間を使用して種谷萬城先生の「原拓書道史」。時代性と書体を考慮して時系列での拓本展示を見ながら解説

される種谷先生の、溢れ出てくる豊富な見識に受講生一同が圧倒された後は、各自拓本を傷めないように注意しながら、カメラで撮影したり、近づいて目を凝らしたりしながら鑑賞していく。



熱心に拓本鑑賞する受講生



拓本解説される種谷萬城先生



席を回りつつ解説される大野祥雲先生

【書写教育】

講 師＝大野 祥雲先生
助講師＝川島 舟錦先生

ホテルを後にして第一会場へ移動し、2限目は大野祥雲先生の「書写教育」。今回から新たに加わった単元で先生も手探りだと言われつつも、教えるための課題「金魚」の一画一画の書き方に加えて、考え方を詳細にしかも丁寧に解説され、受講生は学生に教えることの難しさを改めて感じたようである。

【漢字】

講師＝小浜 大明先生
助講師＝小浜 桂雪先生



小浜大明先生による解説

3限目は小浜大明先生の「漢字」。
頃あまり書かない篆書隸書の臨書が
課題とあって、受講者も随分苦労して
いたようだが、「一字一破」の原則な
ど、小浜先生の的確でとても分かりや
すい指導と助言で、提出課題の曹全碑
臨書を仕上げていた。

【院史】

講師＝辻元 大雲先生
助講師＝前田 龍雲先生

4限目は辻本大雲理事長が講師となっ
ての「書道芸術院史」。前半部分では
院の創立の経緯や、書道芸術院が常に
新しい分野の開拓を担ってきたことな
ど、時系列を基本にエピソードを話さ
れた後、これからは分野階層を問わず
広範に指導者の育成を行わなければな
らないと力を込められた。後半は院の
功労者と院役員の作品解説となり、講
師の先生方の作品も鑑賞解説していく
だき、講習の全課程を終了した。

単位が必要な受講生は所定の24単位
を全て取得した証である単位認定証と、
初日に撮った記念写真を受け取ってそ
れぞれの帰途につくことができた。
交通機関の都合で時間の延長ができ
ず、各單元の時間も短めに設定せざる
を得ない講習会ではあったが、受講生
のひたすら前向きに講義と実習に打ち
込んでいた姿に主管者として救われた
思いである。この会に参加したことが
受講生にとって今後の大きいなる糧とな

ることを願つてやまない。

また本部役員、講師、助講師の先生
には、遠路はるばると山陰の地に足を
運ばれ、献身的な講習会の充実に向け
てのご支援を賜り、お蔭で充実した会
となったこと、感謝申し上げたい。

(記録者＝藤井龍仙・文責＝名越蒼竹)



辻元大雲先生による解説

単位認定証を受け取る受講生



受講生代表謝辞



役員作品巡回展

併催 甲信越支局展

会期 平成24年8月24日(金)～26日(日)
会場 長野県伊那文化会館

寒行委員長(甲信越支局長)

小浜 大明

以前の信州はお盆を過ぎると途端に秋を感じた。しかし近年は大きく異なりこの時期になってもきびしい暑さが続いている。これも地球温暖化の影響だろうか。その様な暑い中、大勢の支局の会員の皆さん協力で巡回展作品と支局展の作品、それに学生展特別賞作品が、スペースにゆとりをもって立派に展示された。

8月24日(金) 当初25日(土)に来訪を予定

されていた理事長の辻元大雲先生が、諸事情により一日前にお見え下さった。

展覧会の初日だったのでテープカットをしていただき、その後、会場にいた40名程の皆さん前で書道芸術院の書についてお話ししただいた。

書道芸術院では部門ごとの独自性を尊重し、地方ごとの活動を重視しているので、変化に富んだ作品が生まれている。甲信越支局でも沖六鵬、小浜梅

開幕式の様子(右から、宮澤梅径・辻元理事長・小浜大明)



会場風景①



会場風景②



めてみた。

(恩地先生)

小浜梅窓先生が甲信越支局の基礎を築いた。書道芸術院も歴代会長の努力のお蔭で今日がある。そのことを忘れてはならない。

書表現には今生きている生きざまをどうとり入れるかが大切である。書は生きるもので、各会場によって作

一日だった。その暑い中を遠路、恩地春洋会長、村野大仙名誉顧問、香川倫子名誉顧問、下谷洋子常務理事、板垣洞仙理事、といった先生方がお見え下

さつた。

午後3時から恩地先生、板垣先生、

下谷先生により作品鑑賞の会が催され80名程の参加者が先生方のお話しに聞きました。その内容を箇条書きにまと

った。

お話しをいただき、最後に、地域で活

動するときの作品表現は自由であって良い、など有意義なお話しをお聞きす

ることができた。

8月25日(土) この日も残暑のきびしい

書道芸術院では部門ごとの独自性を尊重し、地方ごとの活動を重視してい

るので、変化に富んだ作品が生まれて

いる。甲信越支局でも沖六鵬、小浜梅

窓先生が甲信越支局の基礎を

築いた。書道芸術院も歴代会長の努力

のお蔭で今日がある。そのことを忘

れてはならない。

書表現には今生きている生きざまを

どうとり入れるかが大切である。

書は生きるもので、各会場によって作

品の表情が異なって見える。

(下谷常務理事)

書道芸術院の仮名は、玉松会と書泉会の2つのグループで構成されている。その為ややもすると類型化しやすい。従って個性を引き出す努力が必要。甲信越支局には仮名が少ない。巡回展を機に仮名に親しむ人が増えることを望んでいる。

(板垣洞仙理事)

前衛書とは心の表現である。

鑑賞する側も、作品を読もうとせず、作品から受け取る印象を素直に受けとめてほしい。

前衛書で大切なのは線質、構成、墨色、書いた人の心のリズム、などである。これらを念頭に鑑賞してほしい。等々の有意義なお話しをお聞きすることができた。

その後、会場を「マリエール伊那」に移し祝賀の宴が開かれた。辰野町長矢ヶ崎克彦様から御祝辞を賜った後、楽器演奏や多彩な出し物に、時の経つもの忘れ楽しい一時を過ごした。盛会裏に終えた今、地方に居ながらにして中央作家の作品に触れるとの出来る巡回展は、素晴らしい機会だと強く感じている。



院幹部の先生方



恩地会長による作品解説



祝賀会で会長挨拶



下谷常務理事による作品解説



祝宴の様子 ②



祝宴の様子 ①

書道芸術院創立65周年記念

役員作品巡回展

併催 書径舎(北陸支局)展

会期 平成24年8月31日(金)
9月2日(日)

会場 富山県高岡文化ホール

実行委員長(北陸支局長)

津田海仙

おわら風の盆を前日に控えた8月31日に、開幕。

9月1日、高岡文化ホールに、辻元大雲理事長のさわやかな明るい声が響き渡った。

恩地春洋会長から、書道芸術院の歴代会長の作品と書道芸術院の歴史とを織り交ぜながらの解説。歴代会長のそれぞれの素晴らしい可能性を拓く姿に、エネルギーを感じた時間となった。

「お腹をすかしながら文字を書いた先人がたくさんいたことを忘れてはならない。」という恩地会長の言葉には、垣間見た気がしたからだ。素晴らしい作品の中に、その人間性を感じ、わたしに生き方を、書きを、問い合わせて迫ってくるような不思議な感じをもつた。

最後に、「自分が、今、何をするべき

いのかを考える。今を大切に生きてい
くられた。

石雲先生は、「書き切る」という思
いが大切であることや、呼吸と白の美
さ等について話された。「作品をつく
る時、原稿らしいものをつくってみる。
これは『つくる』ということ。筆をもつ
たときには、「生まれる」ということ。
つくりすぎるとよくないし、思いを出
すと焦りになってしまふ。また、生まれるものが、自然でなく格好
をつけてみると、つくりすぎになるこ
ともあつたりする」等と、つくりだす
ときと生み出すときのせめぎあいにつ
いて語つてくださった。

理事・常任総務 滝春芳先生は、
「こうやりたいと思いつくと駄目な
時もある。光が遠くまで差し込む感じ
になるように仕上げてみました。」と
話された。ずっと手刷りの墨を使って
作品作りをしてこられた先生の、墨色
に対する真摯な思いが、ひしひ感じ
られた。

辻元理事長からは、「前衛の方々の、
作品に対する発想をみてみたい。浜谷
先生の脳を開いて発想をみてみたい」
と話されました。また、ややもすると、
パター化することが、ちょっと怖い
と思うと付け加えられました。そして、
「前衛書は、どうしても読んでしまい、
そこから入ってしまうと、まず言葉を
考え、思考がそこで止まってしまうこ



第38回書径舎学生書道展授賞式風景



と。選ぶ言葉も大切であるが、造形と
して書くのであるから、直感的に受け
入れることが大切であること。言葉は
邪魔であること・リズム、呼吸、エネ
ルギー等を追体験するという見方をし
ていくと、書は違つて見えてくると。
みると、感じることから」と話され
た。

書道芸術院の先生方の話を聞かせて
もらい、見方や考え方が始ま
り、深まり、貴重な時間となつた。

続いて行われた書道芸術院創立65周年記念役員作品巡回展の授賞式での、津田書道芸術院会長のあいさつ。会長は、この機会に多くの人に書道の魅力を伝えたいと述べ、また、来場者へ感謝の言葉を述べました。会場には多くの来場者がおり、和やかな雰囲気でした。

な作品のつくり方がある。多彩な展覧会である。書のいろいろな姿を見てほしい。基本的なことをしっかりとを行い、その上でいろいろな表現にチャレンジしてほしい」と、お祝いの言葉を頂戴した。

書の多彩な姿は、人間ひとりひとりの多様な姿であり、それぞれの良さや可能性を發揮していくことが大切だと

いう「生き方」へのメッセージでもあった。

子どもたちの返事が良かったことや嬉しそうな表情がとてもよかったですと話してくださいました。

その後、ホテルニューオータニで行なった祝賀会は、三昧線の力強い音色で始まった。同じ三昧線でも、弾き手

によってこれほど違って聞こえてくるのかと、巡回展の作品とダブって、思いました。

北日本新聞社取締役高岡支社長斎藤寿様、富山県美術連合会会長江幡春濤様、富山県書道連盟会長水口香魚様から、お祝いの言葉をいただき、懇親を深めた。

励ましの言葉の中で、恩地会長が、

津田会長・田守副会長・大石理事長の三羽ガラスが大きく羽ばたいた。深松海月先生、浜谷芳仙先生の精神をしっかりと受け継いで、若い力を伸ばしてほしいと話された。

書怪舎のひとりひとりに託された大切なメッセージである。

記録 総務 宮崎玉善



作品鑑賞会
小竹常務理事による作品解説



作品鑑賞会
小竹常務理事による作品解説



作品鑑賞会
恩地会長による歴代会長作品の解説



作品鑑賞会
恩地会長・辻元理事長による
歴代会長作品の解説

特別研究部臨書課題

（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

何文字臨書してもよい。
(掲載部分以外は不可)

（解説）孟法師碑（貞觀16年）は、褚遂良が47歳の作。早くに原帖を失した幻の名作である。孟法師とは道教におけるいわゆる女道士（女仙）の一人である。諱を靜素という。長命97歳で没した。

この碑は、その4年後に、弟子の陳光などが
法師の徳を頌すべく建てたものである。
書法については、欧法を学びつつ、これに隸
法を加えて最も端雅にして古意豊かな作風を作
り出している。

束_二名教於俄景_一。漢魏豪桀殉榮利於窮塗_二。何異乎下蜉_一生於崇朝_二。

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
(押印のみ可)

東名教於俄景漢魏
豪傑殉榮利於窮塗
何嘗半生於崇朝
爭長於龜鵠秋毫上

陳光などが
束_二名 教於俄景_一漢魏
豪桀。殉_二榮 利於窮塗_一。
何異乎下蜉_一「蝣」生_二於崇朝_一。
爭長於龜鵠_一秋豪出_二。
これに隸
は作風を作
(編集部)

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
(押印のみ可)

用紙 半紙普通判
左の法帖の中から
何文字臨書してもよい。
(掲載部分以外は不可)

毎日展公募サイズ以内・縦横自由
左記の掲載以外も可

〔注〕・かな研究部競書作品は、左の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

・落款を必ず入れる。署名もしくは〇〇臨（押印のみも可）

・用紙は半紙普通判（料紙可）〈たて長に使用〉

別紙を裁断して貼付也可。半懐紙は、半紙サイズに切って使用のこと。

〈よみ〉

安樂破起乃之多者以
あきはぎのしたはい

づくいまよりそひ

東理安留悲東乃

とりあるひとの

いねがてにする

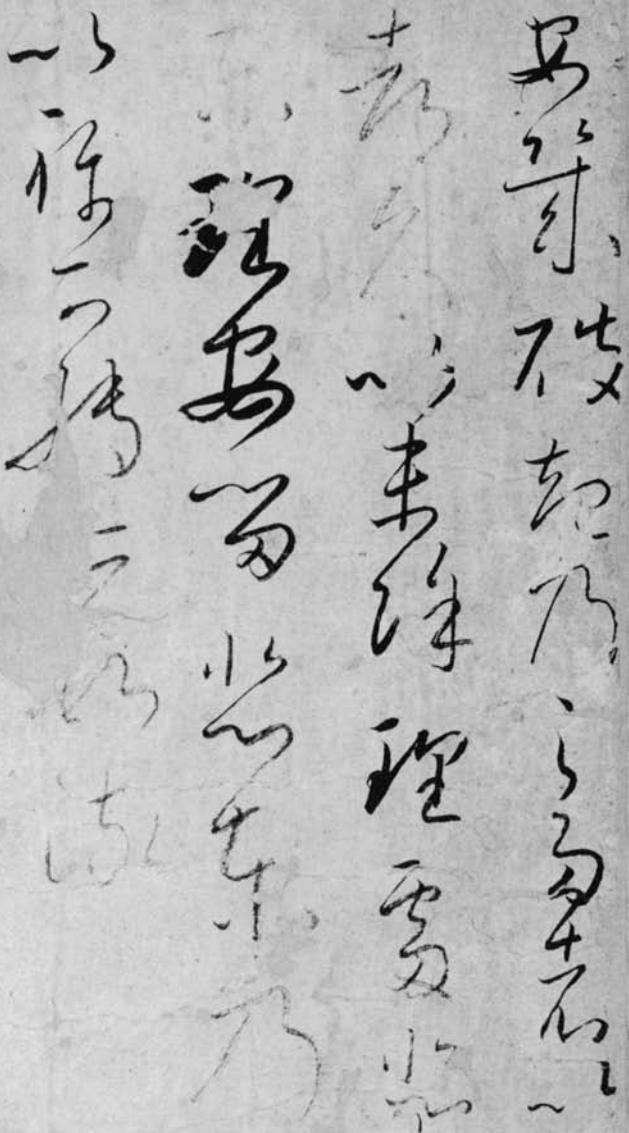
〈解説〉

臨模であるという。

秋萩帖（国宝）は、平安中期に成立したと思われる歌集で和歌四十八首を色変りの美しい染紙で全長8メートルあまりの長い巻子本。草かな（草書体の段階のかな）の手本として早くから注目され、江戸時代に模刻本が法帖仕立てによって版行されたため、巻頭の「あきはぎ」の書き出しにちなんでこの名が呼ばれている。第一紙の二首と、第二紙以降の四十六首との二種に分けることができ、この第一紙の二首が原本の断簡であり第二紙以下はその

料紙の寸法は、第一紙（24・2センチ、第一紙のみ薄藍の漉紙）、第二紙以下（23・7センチ）。四十六首の歌が記され後、王羲之の尺牘57行が記されている。この第一紙は字形が比較的扁平で、形、線ともに引き締まっていて暢達している。行と行の書き合いが美しく、ハーモニーを奏でるかのようであり、筆勢に光彩があり、美しい景色を呈している。（歌は四行書き）

（編集部）



(92%縮小)

最首翠風

聲入井桐
(聲井桐に入る)

「意先筆後」という言葉があります。「意」は心のこと。外ならぬ書者自身の心です。どんな作品にしようかと考える——それが心です。

時は秋。秋だから静かな作品にしようか。渋い線も魅力だ。いや爽やかな澄んだ秋空のような線で行こうか。今学んでいる古典の倣書も——と考えます。

方針が定まつたら書体を決め、表現に叶う墨色、筆、用紙を選ぶことになります。それは楽しい作業です。

私は貫名菘翁の渋く強く、気品のある線質を思い出しました。今、手にしているのは『貫名先生治河議草稿』という和綴じの珍しいもの。〈研修用〉として玄遠社で出版した貴重な冊子です。抑制された静かな境地の書。参考手本は菘翁に及ぶべくもありませんが。

聲入井桐 よみ（聲井桐に入る）

書体＝自由



習い方解説 (-)

小浜大明

懸河之辯
(懸河の辯)

今回から6回担当いたします。

「書」を学ぶには古典の臨書が
大切です。多くの個展を正しく学
習して下さい。それをベースに、

自分なりの表現ができるようにな
れば素晴らしいと思います。今回の
参考手本は「顏真卿」の書風を念
頭に書いてみました。画の粗密が

はっきりした四字句ですが、画数
の多い文字は大きく少し細目に、
画数の少ない文字は少し小さく太
目に表現するとバランスが良くな
ると思います。

「懸」心の左の点は、左方向に突
くようにして書きます。

「河」縦画は中高になるよう画の
中央で押えます。

「之」右払いは筆を押し出すよう
に運筆します。

「辯」画数が多いので少々細目に
表現します。

懸河之辯 よみ(懸河の辯)

書体=楷書



かな規定 初段以上【十一月十五日締めきり】用紙 半紙普通判（料紙可）

石井明子選書

習い方解説（一）

石井明子

かみな月風にもみぢの散る時は
そこはかとなく物ぞかなしき
(藤原高光)



かな作品に創り易いといわれる
新古今和歌集から選びました。
「木の葉が散るのを見るだけで、
とりとめもなく物悲しいよ」とい
う少し古めかしいけれど懐しくも
ある抒情歌です。

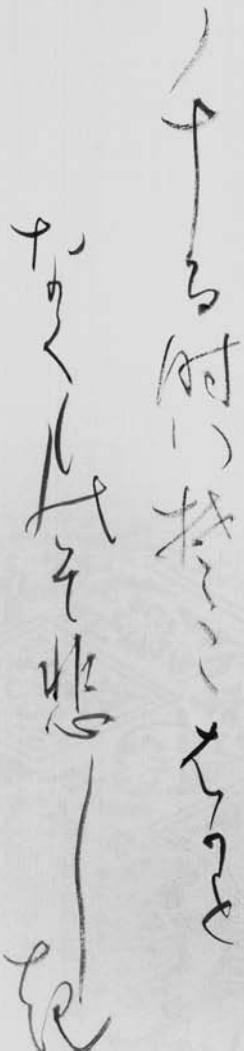
男女を問わず、この種の表現の
ために、かなは生まれ、便利に使
われ発展してきたのでしょうか。
歌を十分に鑑賞した後、構成を
考えます。

漢字、平かな、変体がなの調和
が大切です。特に漢字はかなの中
れの中で、違和感を感じさせない
字形を選びたいものです。

北川博邦編 二玄社刊の和様字
典が手元にあると便利です。

かみな月は、十月、神無月と書
き代え可です。余白を十分考慮し、
風通しのよい作品を創りましょう。

四



よみ方 か(可)みな(那)月風に(耳)もみ(三)ぢ(遅)のち(千)る時は(八)

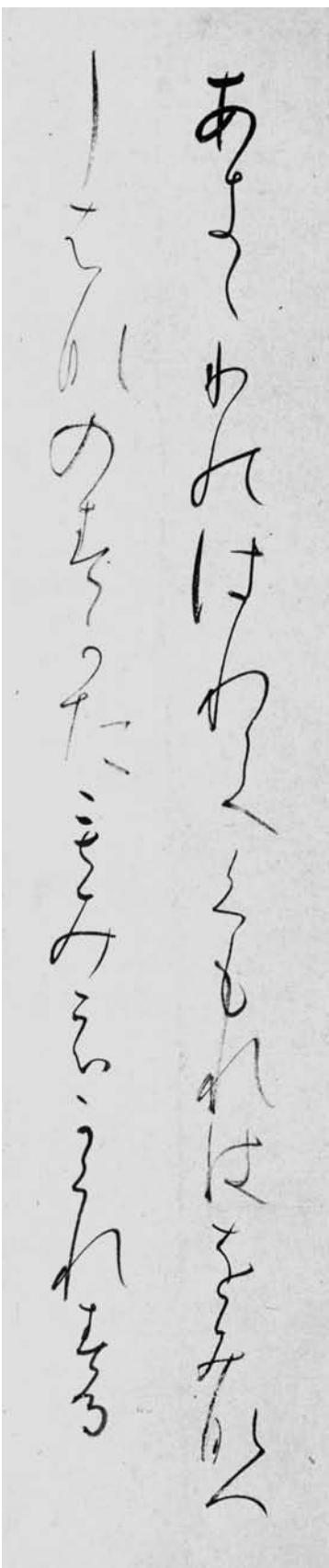
そ(楚)こは(者)か(可)となく(久)もの(能)ぞ悲しき(起)

創作

かな規定 秀級以下【十一月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ （料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

高野切 第三種
(掲載写真縮小93%)

掲載写真のうたを全體、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。



よみ方 あき(支)ゞり(利)の(能)はれて(豆)く(久)もればをみな(那)へ
しは(者)な(那)のす(春)が(可)たも(毛)みえか(可)く(久)れす(春)る

習い方解説 (一)

かな条幅規定【十一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切（料紙可）

天海矩子選書

天海 矩子

我が庭の松の木陰に菊咲けば昔
の人し思ぼゆるかも（正岡子規）

今月は和歌一首をたて二行書き
です。書き出しは大きくなりすぎ
ないように、全体の墨量も注意し
すっきりと仕上げて下さい。

半切二行書きは、全体の文字数
を26文字、多くても28文字位にす
ると繁雑にならず適当でしょう。
余白が生きるように必ず左右の文
字バランスを考えて、墨量と墨つ
ぎの個所も重要な要素です。

創作

よみ方 わが(可)庭の松の木陰に(一)菊咲け(介)ば(八)
む(無)か(可)し(志)のひ(比)とし思ほ(本)ゆるか(可)も(毛)

*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

辻元大雲選書

習い方解説 (一)

辻元大雲

秋氣著人涼似水 晚山和我淡如雲
山和我淡如雲 大雲書

秋氣著人涼似水 晚山和我淡如雲
(秋氣著人に著いて涼しきこと水に似、晚山我に和して淡きこと雲の如し。)

(劉秉忠)

書体=自由



(太宗)

書体=自由

漢字条幅規定 秀級以下 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

小伏小扇選書

習い方解説 (一)

小伏小扇

秋のうてなには秋色が満ちてい
るという唐の太宗の句です。
筆は硬めを使用し、一文字ずつ
の歯切れの良さを念頭におきなが
ら、気脈の貫通するよう心がけま
した。柔らかい筆を使用しますと、
また違った趣きの書となりますか
ら、お手持ちの筆で試してみてく
ださい。

今回より担当します。全て七言
二句を選びました。今月は季節に
合わせ秋の句をやや強い楷書表現
を参考例としてみました。
条幅は上下級共書体は自由です
ので色々な表現が可能です。今回
のような北魏方筆系の楷書表現は
濃墨でやや硬目の兼毫筆又は羊毫
筆で運腕大きくダイナミックに取
り組んでみて下さい。

習い方解説 (-)

千葉蒼玄

月日は百代の過客にして

行かふ年も又旅人也。

舟の上に生涯をうかべ、馬の
口とらえて老をむかふる物は、
日々旅にして旅を栖とす。

芭蕉　おくのほそ道より　蒼玄書

おくのほそ道は松尾芭蕉が書いた日本文学の名著である。

旅が始まったのは、元禄2年3月27日とあり現在の暦では5月半ば頃にあたるが、月日は百代の…という出だしのせいか、私には物寂しい秋のイメージが強い。

さて、今月からペン字を担当することになった。私としては大変不得意な分野であるが、まずは基本通りに楷書を主体に書いてみた。点画はゆったりとおおらかさが感じられる字形になるように心がけた。鋭い引き締まつた文字もあるがやはりペン字も性格が出るものなのだろう。

※落款を必ず入れる。
(自分の名前を入れること)

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

ホープ作品
各部総評 NO.616

漢字部 師範 佐藤 桂香
線に深味があり、字形も安定。

格調の高い行草書作品。別格の実力が窺える上質の作品である。
◎漢字部総評 上級者に行草書作品が多く見られた。筆路が不明確な作も目立った。字典を用い、字形を正確に書こう。(萬城評)



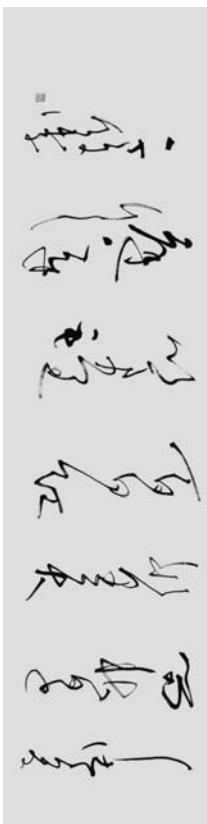
かな条幅部 師範 鈴木 朝夫
抑制のきいた洗練された線質と
揺るぎない構成力は一分の隙なく
見事。何処か壊したい気が…?



◎かな条幅部 総評 庭と変体がな
遅に誤字多く残念。又、墨の色は
美しいもの、墨量过多で重く汚い
作品とならぬ研究を。(明子評)



漢字条幅部 師範 浪川 秋花
木簡帛書風で爽快に表現した作。
軽妙な運筆のリズムが渴筆の変化
を生み、楽しげな雰囲気を醸す。
◎漢字条幅部 総評 上級草書参
考例を模した作は形のみにとらわれ
筆意生きず、下級一行書も字形不
安定作多し、更に努力を。(大雲評)



現代詩文書部 特選 奥村 美樹
清々しい爽快感溢れる作です。

細線のほどよい緊張感のなかに温
もりと優しさを感じます。
◎現代詩文書部 総評 マンネリを
避けるためには表現の幅をひろげ
ることが大切です。(石雲評)

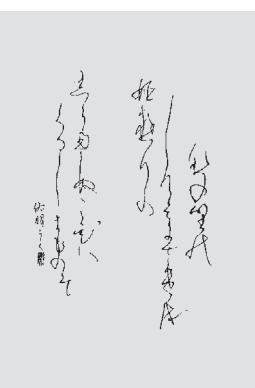
前衛書部 特選 高原 梨秀
渴筆で直、曲の多彩な線、余白

を広くとりながらの構成は全体を
美しく爽快にまとめている。

◎前衛書部 総評 自分の考え方や氣
持ちをどう表現するか、思いを紙
面にぶつけて下さい。(光昭評)

かな部 師範 大橋 佑朋
正確な中に自分のリズムが宿り、
心地よい音色を響かせた作品。落
款の入れ方も調和し安心感があった。
◎かな部 総評 参考手本と同じも
のは大概よく出来ていた。臨書と
同じ筆は線が瘦るので注意したい。
出来るだけ料紙で! (洋子評)

◎かな条幅部 総評 庭と変体がな
遅に誤字多く残念。又、墨の色は
美しいものの、墨量过多で重く汚い
作品とならぬ研究を。(明子評)



名もくらぬ遠き島より
流れ寄る椰子の実ひど
故郷の岸をはがれて
汝はとも波に幾月
鳥崎藤村作詞 大中寅三作曲
光子書

今月の

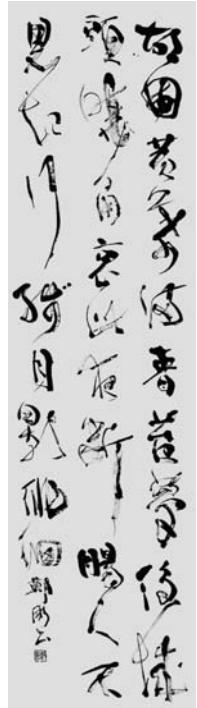
特別研究部優秀作品(特選)

相内珠莉書



60×180cm

- ◆側筆と直筆の線が対象的に響く。白と切るような細線は見事。三部構成は三つの空間が均一だった。(蒼玄評)
- ◆明るく爽やかな動きの線がよい。面から立ち上ってきて、限りなく奥行きを感じる美しい作品です。(明子評)
- ◆余白の白が鮮やかに感じるのは細く鋭い線のリズムと効果的な墨潤りから。爽やかな明るい作。(大雲評)
- ◆紙には表れない空間を感じさせてくれる。筆と共に体をつかって取り組んだ動きがあるからか。(倫子評)



三浦鄭街書

漢字
「聽角思歸」

漢字 (八街) 三浦鄭街

◆胸に持っているものを筆にたくして体全体で表現。少しせわしい感じがするが、次作にご一考を。

(倫子評)

◆小気味良い運筆のリズムが紙面に動きを与え、楽し気な作である。筆脈の流れがもう少しほしい。

(大雲評)

◆たっぷりとした線の中に渴筆が飛翔して軽さを表現している。見せ場がほしい氣もするが作意は不^{よま}用か。

(蒼玄評)

(明子評)

前衛書 (白珠)
相内珠莉

「光の中」

現代詩文書 (もく)
西川藤象

「木本政子の歌」



180×45cm

西川藤象書

- ◆暢びやかな線が潤渴太細の変化を伴ってリズミカルな作となつた。明るく親しみやすい作である。(大雲評)
- ◆遠くから見てよく、近づいてよくの味わい深い作品です。書くことが好きな人の美意識が伝わります。(明子評)
- ◆墨色の変化で作品に大きな波があらわれた感じがする。紙と墨と筆の動きがそれを表現しているの。
- ◆きりっと引き締めた線で空間に差し込むような運筆は独特の感がある。今一步開いた渴筆がほしい。
- ◆紙には表れない空間を感じさせてくれる。筆と共に体をつかって取り組んだ動きがあるからか。(倫子評)

32

漢字研究部
(孔子廟堂碑)

選評 大野祥雲

今月のホープ作品

顯至仁
於藏用

朝倉爽陽

◎漢字研究部總評

漢字研究部 特選 朝倉 寅陽
余白を生かし、六字を収めたためや字形
が扁平になりました。しかし原帖のもつ穏や
かな書風と骨格の強さをよく留傳しています。
丸みのある線には力があり、明るく輝き、汨
和な「虞法」に迫っているように感じました。

孔子廟堂碑は中学生の書写の教科書にも採

用されることもあるて、おなじみの教材です。点画がわかりやすく、字形も整齊で伸びやかです。皆さんの作品、特徴を存分に發揮した作品が多く、よい学書をされていると思いました。どうかこれからも繰り返し書き返し、続けてください。やがて虞世南の息づかいを感じし、ご自身の書が「外柔内剛」に近づくのではないかでしょうか。最後に「章往」の縦画、辞典で調べてほしい方が相当数いました。

千翠芝笑正綠
鶴子雪香華江水

真典和真七直

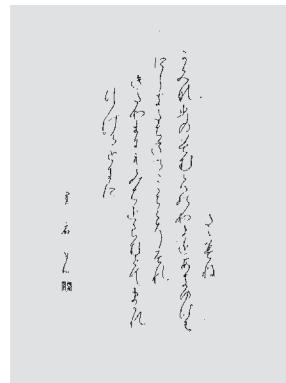
朱雅淳琴桂雪

雅谷純絹魯淑
悠秀風子春子

かな研究部
(高野切第二種)

選評 勝山初美

今月のホープ作品



河岡星扇

◎かな研究部総評
総体的によく書かれた作品でしたが、変体かな毛の誤字を散見。二種は變った字形が多いので字母を調べ読みを確認して書きましょう。

かな研究部成績表

かな研究部 特選 河岡 星扇

力の充ち満ちた厚味のある線は、二種の特徴を良くとらえ、墨色・渴筆とともに特に美しく、日頃の鍛錬が窺われます。洗練された作品となりました。



朝萩寿
夫花子

ち愛彩
代
子石華

寿桂幸
子香平

正美知
紅枝霞

澄秀高華う千秀
春明真祥る葉歎
秀

A 竜正樹春千上如清や前竜志大 A 高石千う英澄岩高玉竹
I 泉華原田葉泉月月ま橋泉引阪 I 井習葉る峰春沼崎松属

小岩岩板飯飯浅
作 川崎上垣高田川

藤高石近辰猪濱金小田春後鈴生伊松平進佐宮石新橋河
村橋橘藤本又田子林玉山藤木駒藤田丸山藤藤内崎井本岡

輝洋郁青幹光君
峯子子鳳生影子

昌雅知淑光理陽蘆嘉哲勝良朝萩壽代愛彩壽桂幸正知紅星
子泉子子子扇一城江子美泉夫花子子石華子香平子枝霞属

もく佳

蓮清華五紅も大百大翠は詢雲秀五卯翠春生光千湘童 大正幕彩蘭大秀華玉
紅月翠葉苑く阪谷雲岭せ扇溪水葉月柳光大昭葉南泉』阪華張 鼎阪水松

青木作
啟子

遊大山森茂松本堀長長西仲富都津近高新嶋波佐後後小木北岸川金門加小
佐和岡田木本佐鉢切谷岡西澤丸田池橋條 谷藤藤林原村田崎岡脇藤川
川理み喜幸 美 纪桜睦真藤白谷幸千久三游慧ど幸柳久三由愛詠知喜萩輝惠東優萩信雅彩
雅江子蘭伴鈴恵雲峰子幸溪子子芳子香華子子萩江子舟子子美子芳香

生上千童泉
入

東明竹や童調覗千泉運秀澄詢紅泉一小千秀泉玉渡澄紅松王 春高奥千広高生青大樹こ高清了石澄東前澄大秀松
実漢美ま泉布水葉紅会春扇風会汀葦葉水会松辺春瑠村松 汀崎田葉島崎大峰阪原だ井月か習春総前橋阪恵村

新荒足淺通
み川

吉吉横山森武宮松本北福深野西永中戸寺田田高鈴鹿塩佐酒小河熊北北鹿小奥大櫻江梅内字薄確岩池阿久澤
田田山口田藤澤重田條島堀村田藤澤野中口橋木田澤崎々井林野谷村又島野山石田田津田井瀬田部久澤

翠玲万な實子琇江

千和 真鶴蘭律龍蕙草美靖歌清陽雍時蓉一博悟可耶み幸智志美明和惠純憲紫欣春裕秋翠星和茂代皓春
子舟子博陸秋景雪子洗詞子汀琴舟子三衣子苑庄江紅子子子風子蘭子暎子光峰祥子夫子泉華緑弘園渥悠華

竜竹舜澄英や翠蒼高椿高た蘭大竜華若詢玄英生東鬼粹生艸渡竜英春椿秀上椿高こ A 昭澄誠竜千和石彩八大生誠有遊こ椿
も泉美水春峰ま吟陽崎翠陵か鼎雲泉祥葉扇象峰大向高江大玄刃泉峰汀翠明泉翠真だ I 微春と泉葉平習 戸雲大和秋雲だ翠く

櫻坂齋斎近込小小小河小黒吳熊工木吉菊菅神川川亀鎌加片沖岡大大遠梅梅生宇字入今今井犬伊市磯石石石池五安新

田田井藤藤山峰林瀧野桜柳 か 美 美

田田山里本山井田藤野府澤山田 野田里山本本岡井田永田 原中山森野田木田保谷行水 渡藤原由ひひひ

龍智祥翠早つ閑慧加晃久啓子

竹豊谷山香都彩善靜典茱聳紫壽龍美和十喜淑珙久虹美華楠悠貴梨英道敏紫清さ甘洋尚佳代藤貞舟風香苗え窓子代惠子

大こ昌青東竹千竹玉も松千梵生白千高詢前澄椿大幕た洞秀東椿大北正大遊大泉春大有椿澄紅竜土正誠澄顧明硯た昌生硯

遷阪だ苑峰伯扇葉扇川く村葉 大露葉陵扇橋春翠阪張か書水向翠阪陸華阪雲會汀阪秋翠春瑤泉氣華和春綠漢水か宛大水外

191六吉吉山山山柳谷森茂村三丸松松場程別深平比林浜演花富橋橋西永富徳積辻田田武竹高須鈴杉神新新志嶋柴猿佐佐

名波野田田本村口 知木田宅山村田井野府澤山田 野田里山本本岡井田永田 原中山森野田木田保谷行水 渡藤原由ひひひ

名拳彩翠光真炎鈴隆美藤翠笑白真陽藍法惠信佳つ琴玉永竹智芝日都悦宏萩溪雅洋蕙美芳弓杏香利祥佳翠滴起称翠冬初

玉祥綾治紀秀風扇子谷芳華楊翠子華子子月子清華蓋雪子香和子子枝彩仙雲子子枝枝子華舟子風子光子子子泉華香實芳